

「生徒の個性を理解してセルフエスティームを高める授業をつくる」

村田 京生子（元公立中学校中学校）

1 はじめに

わかりやすい授業を目指した私の実践は、「英語の授業が苦痛で不登校になったという生徒を出したくない」という思いから始まった。そして、生徒指導困難な学校での20年以上にわたる長い経験の中で、自分がやってきたことが通用しない生徒たちに出会い、彼らが英語を勉強しようとするために何をすればよいのか、どうすればよいのかをひたすら探し求めて奮闘してきた。その結果、生徒のつぶやきが聞こえてきた。「どうせわからないからやらねーよ。」「でも、本当はわかりたい...。」生徒の目線に合わせていったら、生徒のつらい状況が見えてきた。

「発達障がい」という言葉が学校現場に浸透してきて、子どもの行動についての理解が少しは深まってきたようだが、問題行動を起こす生徒たちへの対応の悩みは尽きない。教師が「困ったなあ...」と思っている生徒は、実は「困難を抱えて困っている生徒」で「どうしたらいいのか、わからない」「〇〇で困っている」と言えないだけなのだ、と深く認識することが最初の一步だということを私は学んだ。そして、「生徒が抱えている困難」は多種多様であることも忘れてはいけない。英単語を見ても言葉として認識できない、黒板の文字を書き写すことが大変、じっと座っていることが苦痛、音声にすることが苦手、説明を聞くだけでは理解できない、最初からやろうともしない...実に様々だ。どの子どももありのままを「個性」として大人が受け入れ理解することが大切なのである。端的に言う、教師の仕事は、良い思考・判断力・行動を子どもに身に付けさせることだ。そのための「指導」がうまくいくようにするには、子どもの行動や思考の特徴と効果的な対応の仕方を理解することが必要である。その意味では、「困難を抱えて困っている子ども」も「あまり困っていない子ども」も同じだ。ただ、「困っている子ども」を理解するには、専門知識と冷静な観察・分析が必要なのだ。子ども自身は困らせている要因を自覚できないのだから、我々がやるしかない。彼らが「何で困っているか」を観察・分析して「何があるときでできるようになるのか」を工夫していくと、両者が求める明かりが見えてくる。

私の実践は、特別な取り組みではない。「できない」と言えない生徒のことを考えた小さな気づかひや配慮の積み重ねである。しかし、その小さな気づかひや配慮は、結果的に「困っている子ども」を含めて生徒全員への配慮となり、生徒や授業を変える鍵となっていた。小さな配慮も積み重なれば山となり、子どもとの信頼関係を作り、子どもの意欲を高める。小さな配慮をするときの柱は「セルフエスティーム(self-esteem)を大切にすること」だ。学級経営や行事、生徒指導等も含めてすべての教育活動を進める上で重要な視点である。「自分のよい所もまずい所もひっくるめてありのままの自分を認めてもらっている」、「自分は尊重されている人間なんだ」という安心感が様々な意欲を引き出して、人間らしく生きさせるのだと考える。能力はあるのに自分を見捨てている無気力な生徒たちとの出会いで学んだ。英語の指導技術も大切だが、まず学びたいという気持ちの土台を育てなければ何も始まらないという思いで、「セルフエスティームを高める授業」にすることを意識して工夫と努力を積み重ねてきた。

2 セルフエスティーム(self-esteem)とは？

「自尊心」、「自己肯定感」などの日本語で表現されることが多い。「自己に対する肯定的な態度」「自分はあるがままで尊い人間だと自覚する、社会の中で意義があると感じる心理状態」を意味し、「他人からの評価ではなく、自分が自分をどう思うか」というものである。私は、「生きる」ことを下支えする土台のようなものだと考える。日本では、昔から「謙遜」が美德とされる文化的背景があつて、自分の子どもを褒めることが少なく、諸外国と比べて「セルフエスティーム」が低いことが指摘されている。H29年度の内閣府調査(13歳～29歳の若者対象)によると、「自分に満足しているか」に対して「そう思う。どちらかといえばそう思う。」という人が、アメリカでは87%いるのに、日本では45.1%。「自分には長所があるか」に対しても、アメリカでは91.2%、日本では62.3%という結果だった。「セルフエスティーム」が低いと、ネガティブ思考になりやすく「失敗→自責の念→セルフエスティームが低くなる」という負のスパイラルに陥る。自分は不要な存在だという思いが強くなったり、自分を守るために周りへの攻撃性が高くなったりして、自殺やモンスターペアレント、薬物などの社会的問題につながりやすい。セルフエスティームが高いと、自分に自信をもち、難しいことに挑戦しようとしたり、失敗を乗り越えようとしたりする力が高くなるし、他の人を認めることもできる。よりよく生きていこうとする力が高まるのだ。ただし、高すぎれば自信過剰となるので、高ければ高いほど良いということではない。

すべての大人が、子どものセルフエスティームを高めることの重要性を認識して子育てに関わったら、もっと子どもが生きやすい社会に変わっていくのではないだろうか。

3 子どもの実態と英語の授業がかかえる困難

1.子どもの実態

ア) 発達障がいと考えられるケース

- ・前を向いて話を聞くことができない。
- ・しゃべりたい時に勝手に好きなだけしゃべる。
- ・集中力が続かない。目の前の刺激にすぐ反応してしまう。
- ・耳で聞いて内容を理解することが苦手で、聞き間違いがよくあったり、教師の指示を聞いて取り組むのに時間がかかったりする。
- ・板書をノートに書き写すことが苦手である。(眼球運動の問題、短期記憶の問題、手指の機能の問題等で、書くこと自体に時間とエネルギーが必要な場合もある。)
- ・アルファベットのまとまり(単語)を言葉として認識すること自体が困難である。

イ) セルフエスティームの低下と考えられるケース

- ・「どうせ、できないにきまっている」と最初からやろうとしない。諦めが早い。
- ・失敗することを恐れ、前向きに挑戦しようとしなない。わざと冷たい発言をする。
- ・友だちの良さを認められない。自分に自信がなく、相手をけなすことで自尊心を保っている場合が多い。(→授業妨害につながりやすい)

(2) 英語の授業がかかえる困難

ア) 言語活動がやりにくい。時にはできない状況もある。

- ・教師の指示を聞いていない、理解できない、やる気がないなどの理由から、言語活動の時間が日本語でのおしゃべりや友だちとのじゃれ合いの時間になってしまう。(小学校からうるさいのが普通という感覚だということもある。)
- ・説明や注意が多くて一つの言語活動に時間がかかり、予定していた他の活動ができない。

・単なるQ&Aの活動でも気に入らない相手とはやらない。そのため、話してもらえない生徒にとっては、英語が孤立感を感じる時間になってしまう。

イ) 「言葉は、耳から取り入れることの方が文字よりも簡単」だと思っていたら... 耳で聞いて理解することが困難な生徒は多い。

ウ) アルファベットのまとまり(単語)を言葉として認識しにくいと、何度書いても読んでも単語や英文等が積み重ねられていかない。この困難さに苦しむ生徒はクラスの約30%と言われる。

エ) 学ぶことへの意識が低く学習習慣が身につけていないために、英文や単語を覚える努力をしない。テストができないからやる気を失うという悪循環に陥りやすい。

4 困難をどう切り抜けるか

(1) 教師の姿勢

「困っている子ども」は、今までに大人から叱られたり馬鹿にされたりして、セルフエスティームが低くなっている場合が多い。そのような状態では、いくら効果的な実践を行っても生徒はやる気になれないし、学力も身につかない。教師自身が生徒の声に耳を傾けながら、彼らのセルフエスティームを高めようと意識して接していくことは、生徒の信頼を得ることになり、生徒にやる気を持たせることにつながる。それが、人を育てていく上で最も重要な基盤になると、私は考える。

私は、普段から次のことを心掛けながら指導してきた。

○誰も見捨てない。伸びる可能性がある本人に自覚させるメッセージを伝え続ける。

○生徒に恥をかかせない。

○生徒の困り感も不満も苦情も、まずは聴いて受け入れる。もちろん言いなりになるわけではない。生徒の考えを理解することである。

○生徒の「わからない」を受け止める。「わからない」と言うことは、学ぶ意欲があるということだ。わからないところがわかった瞬間、生徒は学ぶ喜びとわかった嬉しさを味わい、学習意欲がわいてくるのだ。

○常に「よりわかりやすい授業」を追求して教材等の工夫をする。教師の積極的な追及の姿勢は、生徒に「自分たちを大切に思ってくれている」という安心感を与え、信頼を得ることにつながる。

○指導するということは、行動が間違っていることを生徒に気づかせて良い行動に変えることである。決して人格を否定してはいけない。まずい行動を指摘するより、良い行動ができたことを褒めて本人に自覚させる。そうすると、子どもは良い行動を身につける喜びを感じ、またやろうとする。普段の授業でも「プラスの言葉」を最大限活用したいものである。

○授業における学習活動に生徒全員を参加させる。そのために、バリアになっているものを見つけて支援につなげる。具体的な授業の工夫の柱は、気になる子には「ないと困る支援」、どの子にも「あると便利な支援」を増やすこと、つまり「授業のバリアフリー」である。

1. 生徒の実態分析と対応の仕方を工夫する

ア) 生徒の特徴を理解して対応を考える

①多動傾向のある生徒やぼーっとしがちな生徒、耳で言葉を聞き取るのが苦手な生徒のために

・7分程度(長くても10分)で変化する授業を組み立てる。

・一度に2つのことやらせない。書く時には書くことに集中させる。聞く時には全員の顔がこちらを向いているのを確認してから話す。生徒に書かせながら教師が説明するのは禁物である。

・単純で短い説明や指示をする。(方法が複雑な言語活動はやらない)

- ・大切なところは「大切なところだよ！」と注意を喚起してから説明するなど、メリハリのある話し方をする。時にはわざと小さな声で話すことも有効だ。
 - ・授業の流れをパターン化して、わからなくなる不安を減らす。
 - ・今やっている活動がわかるように、学習活動を書いたカードを黒板に提示する。
 - ・ノートの使い方をパターン化して、どこに何を書けばよいかを明確にして指示をする。
- なお、4月最初の単元や会話、長文等の単元は、補助プリントを作成して生徒の負担を減らす。
- ・教科書本文についてのQ&Aのプリントには、質問文とヒントを書いておく。できる生徒は、質問文を見ないで教師の英語を聞いて答えるが、聞くだけでは無理だったら質問文やヒントを見て答える。（プリントの活用は、英問英答の力を養うためだけでなく、テストにも生かせる。）
 - ・文法プリントを使うことで、聞き漏らしたりして理解不十分なところを補う。
 - ・黒板の利点も含めて視覚的な効果を工夫する。気を引くような「視覚的なモノ」を提示するのもよい。絵や単語カードを活用すると、カードの色を変えることで英文の構造を理解するのに役立つし、会話活動でも英文を作る時のヒントにも使える。（ただし、色だけに頼ると色覚に問題のある生徒にとって困ることになるので、印をつけるなどの補足が必要な場合もある。）
 - ・プリントを忘れてたりなくしたりすることが多いので、余分に印刷しておく。やらないことは叱るが、忘れたことは責めない。

②英語の発音が覚えられず、英文を読むことが苦手な生徒のために

- ・教科書の本文にフリガナを書いたプリントを渡して、自力で読むまでの支援をする。とにかく読めれば、ペアでの音読練習も成立し、恥ずかしい思いをしなくて済む。家庭でも音読練習ができる。
- ・言語活動で使うプリントの裏面にフリガナ付きバージョンを印刷しておく。生徒は使いたい方を見て活動する。そうすることで全員が活動に参加できるし、英文を何回も言っているうちにフリガナがなくても言えるようになる。

③書くのが遅い生徒のために

板書を写すなどの時間は確保されなければいけない。早く書き終わった生徒はノートの単語練習に取り組みせて、無駄な時間を作らないようにする。しかし、生徒によっては書くこと自体が大変負担の大きい場合がある。「合理的配慮」として何ができるのかは、今後検討すべき課題だろう。

④生徒間の人間関係への配慮

- ・孤立しがちな生徒がいる場合、自由に相手を探して会話することを避ける。パートナーチェンジで回数をこなす形や4人班の仲間と会話する形にする。
- ・パートナーチェンジをする時、仲たがいでいてペアにはいけない組み合わせがある場合があるので、担任からの情報を得ながら配慮する。

⑤集団の中にいること自体が苦手な生徒や言葉を発するのが苦手な生徒への配慮

生徒によっては、軽くスルーしてほしい場合がある。目立つことを嫌う生徒や言葉がスムーズに出てこない生徒、教師の熱意を圧力と感じる生徒がいることを知ってほしい。教師の熱い思いを押し付けてはいけない。

イ) 言葉の力は偉大

注意するにも一工夫し「認める・ほめる言葉」のシャワーを浴びせる

- ①「〇〇さん、静かにしなさい」という注意の仕方は危険である。
「なんだよ。俺ばっかり…」→「気にいらねえ」→「先生は敵だ」というイメージを生徒は抱いてしまう。

②通り過ぎながら肩（や机）をたたいてそっと「前を向こうね。」と小さく声をかける。やっていないことを注意するよりやるべきことを指示する。「今は〇〇する時間だよ」

③寝ている生徒には「具合悪いの?」。寝ている人には私からの”I love you.”をプレゼントするとあらかじめ言っておいて、オープンに”Good morning. I love you.”とささやく。軽い笑いに変えることができるが、生徒によっては恥をかかされたと思う場合もあるので注意は必要だ。

④おしゃべりしていて気になる生徒には「何か、わからないことがあるの?」と声をかける。おしゃべりをやめるよう言いたくなるものだが、本当にわからなくて隣の子に聞いている場合もある。

⑤「できたね」「がんばったね」「君ならできるよ」「すごいね」「先生を超えてる」・・・いくら言っても言葉はタダ!使わなくては損だ。「褒めるほどではないのに...」と躊躇する人がいるかもしれないが、やったことを認めるだけでよいのである。いつもはノートを開いていない生徒がノートを開いていたら「ノートの準備マルだね。」と言えばよい。それが続いたら「続いているね。バッチリだね。」と続いていることを認めればよい。良い行動を身につけさせたかったら、否定的な言葉より肯定的な言葉を使うことだ。人は、褒められたり認められたりして良い気分を味わうと、また褒められたくて良い行動をするものである。

⑥配慮はするが、授業妨害は許さない。生徒指導上の問題行動については毅然として対応し、場所と時間を設定して別室で個別指導をする。ただし、頭ごなしは禁物だ。個別指導は信頼関係を作るチャンスである。常に「どんなことがあっても、君のことを応援しているよ。君に頑張れる人になってほしいんだよ。」というメッセージを言葉と心と態度で生徒に送る。

★いつの間にか、教師の心の中に「お前がいるからやりにくい」という気持ちが生まれていませんか?その気配を生徒が感じてしまうと教師を敵視するようになり、もっと指導困難な状態になります。反抗的な態度でもグッと我慢して愛情のあるメッセージを送り続けると生徒は変わります。褒められたり、期待されたりして「いやだ」と思う子どもはいません。心の中では嬉しいのです。

(3) 「わかった」「できた」という達成感を感じさせる指導と支援をする

ア) 「わかった」を増やせるよう、「よりわかりやすい授業」を追求して教材等の工夫をする。配慮を要する生徒にとって「わかりやすい授業」は、すべての生徒にとっても「わかりやすい授業」になり「わかった」と感じるができる。また、教師の積極的な追及の姿勢は、生徒に安心感を与え、信頼を得ることにつながる。

イ) 教科書の新出単語を中心に1回25問(50点)の単語テストを年間10回程度行うが、事前に示した25問をそのまま出題する。努力すれば満点が取れるのだ。また、家庭学習が期待できない場合には、プレテストを行ったり練習時間を授業中に設けたりする。家でやらないなら学校でやらせるしかない。100問を一気に行うテストも考えられるが、見ただけで諦める生徒が多く、25問が精いっぱい。

ウ) 定期テストに向けての学習プリント(文法問題)やテストのポイントを詳しく説明した「定期テストに向けてがんばろう」プリントを配布して、テスト勉強を支援する。特に英作文問題をあらかじめ提示して準備させると、少しは取り組んで白紙回答が減る。良い点数が取れることは、学習意欲につながる。ただし、授業中に短時間でも取り組んで助走させてあげないと何もやらない生徒は減らない。

エ) 努力の積み重ねを実感できるノート作りを徹底させる。ノートを一括購入し使い方をパターン化して、どこに何を書けばよいかを明確にする。本文を書く、単語の意味を書く

などの点検項目を明確にして点数化するので、頑張れば誰もが満点が取れる。ノートをめくると自分の努力の積み重ねを実感し、達成感が得られる。予習（本文と新出単語を書く）の部分は、長期休業中の宿題にして授業に備える。

オ) 日頃から、生徒が「わからない」と訴えたことにはすべて対応する。わからないことをわかるようにするのが教師の役目だ。生徒が安心して「わからない」と言える関係でありたい。英文の書き換え問題などは、グループで教え合いながら取り組ませると共に、テストで合格しなかった生徒を昼休みなどに個別指導する。

5 やる気も学力も授業から

これまでに述べてきた配慮と工夫に加えて、学力をつけるための具体的な取り組みも盛り込んで、できるだけ暇な時間を作らないように授業を組み立てる。

(1) 授業の流れ

- ①挨拶（日付や天気などの確認を含む）
- ②歌：1ヶ月に1曲くらいのペースで
- ③復習タイム：10分程度、日替わりメニューで復習する。

<新出表現の導入と練習>	<教科書本文の内容読解>
④新しい表現の導入 ⑤練習（全体で充分練習してから個人へ） ⑥言語活動【コミュニケーション+ゲーム的要素+簡単なやり方+学習効果+α】を考えて工夫する。 ⑦ノートにまとめる （ノートの行数も考えて英文を精選） ★文法はきっちり教える	④新出単語の意味の確認と発音練習 ⑤音読(パラグラフで区切りながら、はっきりくつきりゆっくり範読して、リピートさせる) ⑥内容読解(黒板に英文を書きだす) ・動詞に印をつけながら概要を読み取る。 (プリント使用) ・詳しく読み取る。(説明後、ノートにメモ) 主語と動詞を確認→黒板の英文の下に、英語のまとまりごとに読み取りながら日本語を書く。 ・強く読むところに●印をつける。 (音読のめやす) ⑦音読練習(回数や方法を工夫する) ⑧T-Fあるいは英問英答(プリント使用)

- ・教科書の音読（1分間既習ページを読む）
- ・ビンゴ（既習の単語）
- ・基本文の暗唱
- ・英語の質問に答える（Q&A Drill）

(2) 「わかりやすい授業」を目指して

ア) 子どもにとっての困難さを見抜く

- ・三単現の英文も過去形の英文も導入は疑問文から

例：Do you play soccer?

Does she play soccer?

Did you play soccer?

- ・教科書で扱う文法の順番が妥当か？必要なら変える。

- ・文法の説明は、かみ砕いてかみ砕いてより単純に！

英文の書きかえ例：「Doesつけて、s取って、？」のスリーステップで。

イ) 黒板とチョークの利点とカードの利点をフル活用

- ・チョークは付け足しも消すのも自由自在。

- ・カードは繰り返して提示できる。

例1) 文法用語をカードで提示する

不定詞：to + 原形動詞

～すること

例2) 絵を英文の中に盛り込む。(小学校教科書で用いられている)

Which do you like better, or ?

- ・カードの紙の色を変えれば英文の構造を示すのに最適。
(色覚に問題のある生徒がいることに配慮して、線で囲むなども有効である。)
 - ・会話活動でもカードは便利。何回でも使えるし、色を変えればヒントにもなる。
- 例) picture cardの色を分けることで a(黄)と an(水色)の使い分けを示す。

ウ) 学習した軌跡がわかるノート作りの徹底

- ・学習したことが全てわかるノートを目指して使い方を計画し、明確に指示する。
- ・ノートに書いた新出単語に印をつけさせて、覚えるべき単語等を明確にする。
【○：意味が分かって読める ◎：書けるようにする ㊦：絶対覚える!】
- ・英文の仕組み等の説明プリントは、ノートに貼って常に確認できるようにする。
- ・英文の内容によっては、図や絵を入れた内容読解プリントを使う。

エ) 学習(文法)プリントの活用

- ・学習したことはすぐ復習(宿題orまとめの時間を作ってグループ学習)

オ) アンケート結果より：「英語の授業はわかりやすいと思いますか」

- ・わかりやすい (32人/85人、37.6%)
- ・まあまあわかりやすい (51人、60%)
- ・少しわかりにくい (2人、2.4%)
- ・わかりにくい (0人)

★「わかりやすい」と「まあまあわかりやすい」の合計は、毎年95～97%である。

(3) 授業とテストと評価

【目標提示→授業で力を養う→テストで発揮・確認→評価→やる気UP→もっとできるように授業で頑張る】というように、授業での学習活動が自分の学力を伸ばし評価に結び付くことを生徒に意識させ、授業での学習意欲を高めることにつなげる。

ア) コミュニケーションテスト

学期に1回、ALTと1対1でやる緊張感と楽しさを味わう。<スピーチ・ALTからの質問・ALTへの質問>で構成し、ALTが採点する。全体でスピーチを発表し、「60～90秒間話し続ける」という課題にすることもある。

イ) 音読テスト

教科書の英文(1ページ)を音読する。評価項目は4つ(正しく読む、発音、速さ、強弱・リズム)、1項目5点で20点満点。定期テスト直前の授業中に、廊下で一人ずつ行う(裏番組でテスト勉強)。評価のためというより指導のためで、1分でも1対1の個別指導ができる。終了後、高得点の生徒に読んでもらおうと、他の生徒への良い刺激になるし、その生徒にとっては自信になる。

ウ) 単語テスト

教科書の新出単語を中心に1回25問の単語テストを年間10回程度行う。単語テストは、定期テストまでに新出単語を覚える良い機会になり、単語テストでの努力が定期テストにつながるよう計画的に行う。また、努力次第で満点が取れるので、文法等が苦手な生徒でも単語テストは合格(8割)しようと頑張る。

エ) 定期テスト

授業中に扱った英問英答や読解のポイント等、授業でやったことが反映される問題を考える。「頑張ろうプリント」で示した覚えるべき表現や英作文の問題からも出題して、努力した分が報われるようにする。

1年を見通してまとまった英文作りに挑戦する課題を設定して取り組み、音声と文字の両面から定着を図る。

【スピーチの英文を作る → コミュニケーションテストで暗記して発表する → 定期テストの英作文問題として出題する】

例) ①自己紹介、友だち紹介、私の宝物・大事なもの、②夏休みの思い出、将来やりたいこと、行ってみたい国・都市 ③日本文化紹介、自分の考え

6 実践を振り返って

教育は、教える者と教えられる者との間に信頼関係があって初めて成立するものだと思う。信頼関係がなくては、プラスになるものは何も生まれてこない。また、本当の意味で「指導した」と言えるのは、子どもが良い方向に変容したときだと思う。そのためには、子どもを様々な方向から理解するところから始まる。発達障がいもセルフエスティームの低さもすべてひっくり返して、子どもの行動の裏側にどんな理由が隠れているかを探ることで、指導の方向性やコツが見えてくる。理由を探るためには、教師を含めすべての大人たちが、その知識を得る努力をして学んでいかなければいけない。理解しない大人たちの犠牲になるのは子どもたちである。不適切な叱責で子どもを歪ませてはいけない。どんな子どもにも成長したいという願いと成長する可能性はたくさんある。成長させる手だてを大人がわかっているか否かで大きく違ってくるだけのことだ。

私は、たくさんの「困った」を抱えた生徒と出会ったことで、たくさん勉強し、たくさん考えた。その結果、生徒の「困った」を見抜けるようになり、彼らの「困った」感を理解して生徒を支えられることが増えた。そして、良い方向に変容した生徒の姿をたくさん見ることができた。何よりも、私自身が、どんな生徒でも「必ず良い方向に変えられる」と信じて冷静に対応できるようになった。まずは、「できるはずだ」という教師の思い込みを捨て、「英語を理解するのがとても困難な子どもはいるのだ」と認識することが第一歩である。「できないかもしれない」子どもの顔を思い浮かべて、教師の視線を自分の物差しではなく生徒の物差しに置き換えて、彼らの抱える「困った」を見つけようと探し求めたら、きっと見えてくると思う。

学級経営においても、英語を教える時においても、小さな配慮の積み重ねは大きい。指導がうまくいかなかった頃を振り返ると、自分の指導の仕方のまずさをしみじみ感じる。小さな配慮は、子どもを大切に思う気持ちから生まれたわけだから、結果として授業をわかりやすくさせただけでなく、子どもに安心感を与え、信頼関係も強化することができたのだと思う。英語が好きにならなくてもいい。生徒が「嫌いな英語だけど頑張った。」と言えたなら、「嫌いなことから逃げないで頑張った自分」に成長したことになる。

私は、どの子にも小さな配慮と共に「あなたに頑張れる人になってほしいよ。君は、昨日の自分より一歩前進できる人だと思うよ。」というメッセージを送り続けた。生徒指導困難な学校での日々、100%ではないけれど、そのメッセージが確実に生徒に届いているという手応えを感じることはできた。